

# 松村通信第 1 3 4 号

2023 年 1 月 8 日

松村勝弘

## コーポレート・ガバナンス論の前提 としての自利追求型合理的経済人 — 共同体論、関係性を踏まえて —

**制度設計** 前号で、欧米でも日本でも会社法という制度が自利追求型合理的経済人モデルを前提として制度設計されていると述べた。しかしとりわけ、日本において現実の会社やそこで働いている人間は必ずしもそのような合理的経済人ばかりではない、否むしろ共同体で相互に関係をもって生活しているような人間ではなかろうか。そこで監査役が閑散役といわれる始末で、経営者監視の機能を果たしていない。それが前近代的な共同体の残滓とみるかどうかという問題はあるが、現代の欧米でもそのような共同体は「残っている」、否共存していると言うべきだろう。だからこそ社会は安定していたのである。近代社会を特徴づけるリベラリズムが行き詰まっているのも、前近代の遺産を食い潰したからだとも言われている。いわく「生活のほぼすべての面で — 家族や近隣社会、共同体、宗教、そして国家においてさえも — 社会の絆が失われつつあることは、リベラリズムの進歩の論理を反映しており、この上なく不安定な状態の原因になっている。」(パトリック・J・デニーン、角敦子訳[2019]『リベラリズムはなぜ失敗したのか』原書房、48 頁)

西欧でも前近代社会の「残滓」が社会の安定に寄与していたのである。西欧先進国の典型であると言われているアメリカにおいて、キリスト教がいかに浸透しているかを見ればよい。アメリカにおいて近代的個人主義は建前ともいえるべきである。寄せ集めの多民族国家アメリカはそういう建前から出発しないと社会が安定しないという宿命を負っている。しかも彼らは努力して合理的経済人であろうとしている。

**合理的経済人としての自己形成** かつて、宇沢弘文氏がどこかで書いていたが、氏が在米

中、アメリカの経済学者が利己的に自分の利益ばかりを追求するので辟易して、どうしてそんなことをするのかと訊ねたら、経済人としてそうするのは当然だと言いつつ放ったという。新古典派経済学が合理的経済人モデルで経済活動を理論化しているが、自分もそう生きるのが当然だと自己を形成する、自己成就している実態が語られていた。マルクスは存在が意識を規定すると言ったけれども、この場合明らかに意識が存在を規定している。

新古典派経済学では個人は合理的経済人である、と仮定してモデルを組み立てているにすぎない。それが実在している人間だ、規範だと考えると、社会はギスギスしてしまう。日本人がアメリカ人になじめない部分はここである。もちろんすべてのアメリカ人がこうであるわけではない。多くの社会学者が共同体の復活を願うのは、そういうギスギスした社会を好ましく思っていないからであろう。彼らは、人間は良心を持った道徳的な人間として生きるべし、と考えている。

**個人主義** ところが、上述したように、経済学を学んだ人間、とりわけアメリカ人は利己的な個人主義者として生きるのが当然だと考える。「『個人主義』が社会的諸理想のある全体を特に意味し、巨大なイキオロジー的重要性を持つにいたったのは、アメリカにおいてであった」(ルークス「個人主義の諸類型」ウイナー編、荒川幾男他訳[1990]『西洋思想史事典』平凡社、214 頁) という。そして、個人主義者でも「デカルト以降では『道徳は個人個人が決めるものだが、個人の理性が働き共通の「理想の道徳」に収束するはずだ』という考えにまとめることができる」(鄭雄一[2018]『東大教授が挑む AI に「善悪の判断」を教える方法』扶桑社新書、53 頁) という。「理想の道徳」に収束するとすれば、それは人間がいわば神になることかもしれない。ルソーの一般意志などもそれに類する。西欧のキリスト教という一神教のもとでこそそのような考え方が出てくるのではなかろうか。

